

昭和二十九年（うま）

神吉西部落

〃 三十未年（ひつじ）

西村部落

中西部落

〃 三十一申年（さる）

大國部落

〃 三十二酉年（とり）

下富木・清水・西脇・長

慶の各部落

〃 三十三戌年（いぬ）

宮前部落

〃 三十四亥年（い）

天下原部落

〃 三十五子年（ね）

神吉東部落

以下昭和三十六丑年（うし）には再び一順して神吉西部落となつていますが天下原部落は一度抜けて宮前部落の次が神吉東部落となつています。

尚昭和四十八年より各部落を部落と称しないで町内会と改称しております。また昭和五十年は国恩祭のため秋季祭礼は休止しております。

## 付記 ②

八幡神社の祭礼について昭和六十年三月、加古川市教育委員会発行の「加古川文化財報告8」「加古川市の民俗」に記載されています。その中の主な内容をとりあげてみますと、

### 一、神吉八幡神社の沿革

神吉八幡神社の由緒については延宝八年（一六八〇）に神

宮寺中之坊で記された「八幡神社縁起」に詳しい。しかし今回の調査では、この縁起の現存を確認することができなかった。したがって現在の縁起は『播磨鑑』『増訂印南郡誌』『兵庫県神社誌』による。その内容については前述の妙見宮由来記等に記してあるが明星＝虚空蔵菩薩と妙見大明神との関わりなど不明な点が多く、来歴は複雑で興味深趣であるが、その記事は現在のことごとく散失して伝わっていない。

### 『増訂印南郡誌』所引「妙見宮由来記」

また氏子ムラについて「そもそも当社の氏子の村落は神吉村・天下原村・大國村・宮前村・下富木村・清水村・西脇村・長慶村・西村・中西村・磯（砂カ）部村の十一か村である。」とある。しかし伝承では大國、鼎四部落（長慶・西脇・富木・清水）・西村・中西・宮前・神吉・天下原・砂部・出河原が氏子ムラであったが、いつのころからか出河原・砂部は出河原の宮の祭をするようになったので神吉八幡神社の氏子ムラから抜けたという。

### 二、文政の祭礼絵巻

神吉八幡神社には、文政三年（一八二〇）の奥書きを持つ絵巻物がある。この絵巻に見える行列は、小頭人を中心としたものと大頭人を中心としたものとの二つに分けることができる。それぞれについて人数、持ち物などをまとめると次表のようになる。

役名	人数	備考
(シデ振り)	2	子供 紅白のシデ
御先太鼓(太鼓)	2(4)	子供
御先太鼓(かつぎ手)	28(32)	「天幕廻々緋、蒲団屋根」はだし
猿田彦	2	「緋縮緬」面を被り、棒を所持
母衣花(ホロ花)	14	「凡百人斗、二歳より十三歳迄」男女、背負うものと手にもつものあり
母衣花の付添い	6	
旗	1	「奉納妙見宮」白色の旗、陣笠・帯刀(一本)
母衣花(ホロ花)	8	
母衣花の付添い	3	
弓	2	「式張(張)」陣笠・帯刀(二本)
鉄炮	2	「式張」陣笠・帯刀(二本)
(不明)	2	衣装は前二者と同じ持ち物なし
台笠	1	帯刀(一本)
立傘	1	帯刀(一本)
挨拶箱	2	帯刀(一本)
白幣	1	冠・白の狩衣・帯刀(一本)
小頭人	1	乗馬 冠に花あり
(馬)	1	
警護	6	袴 棒を所持
太刀	1	子供
鎧	1	帯刀(一本)
長刀	1	帯刀(一本)
床机	1	帯刀(一本)
茶弁当	1	帯刀(一本)
小太鼓	11	子供 二人でかつぐ

〈表㉔ 小頭人を中心とした行列〉

注、役名・人数の( )は、絵巻には記載されていないが、存在が推定できるものである。

役名	人数	備考
(シデ振り)	2	子供 紅白のシデ
御先太鼓(太鼓)	2(4)	子供
御先太鼓(かつぎ手)	27(32)	「天幕黒天鶴紋、蒲団屋根」はだし
猿田彦	2	「上緋縮緬」面を被り、棒を所持
母衣花(ホロ花)	7	「凡百人斗、二歳より十三歳迄」男女、背負うものと手にもつものあり
母衣花の付添い	3	
旗	1	子供 「妙見大明神 願主」白色に赤子の旗
母衣花(ホロ花)	12	最後の一人のみ 自然の枝を持つ
母衣花の付添い	3	
御弓	2	「式張」陣笠・帯刀(二本)
鉄炮	2	「式張」陣笠・帯刀(二本)
長柄鎧	2	
毛鎧	2	
鉾	2	
太刀	1	子供
従士	2	陣笠・帯刀(二本)
金幣	1	冠・狩衣・帯刀(一本)
(シデ振り)	2	子供 紅白のシデ
神輿	14(16)	「八角」はだし
警護	4	二人は神 棒を所持
御検所御役人	7	袴 帯刀(二本)
別当宝林寺	1	
(かつぎ手)	6	
神子	1	女性 冠
白幣	1	冠・狩衣・帯刀(一本)
大頭人	1	乗馬 白の狩衣
(馬)	1	
供尾人	1	大頭人と同じ衣装
家子	1	大頭人と同じ衣装
警護	5	袴 棒を所持
太刀	1	子供
従士	2	陣笠・帯刀(二本)
鎧	1	
台笠	1	
立傘	1	帯刀(一本)
挨拶箱	2	
茶弁当	1	
合羽籠	1	帯刀(一本)
小太鼓	10	子供 二人でかつぐ

〈表㉕ 大頭人を中心とした行列〉

以上のように、この絵巻から近世には、総勢約二百六十人という盛大な祭礼が営まれていたことがわかる。

### 三、現行の祭礼のまとめ

#### 祭日・ジンジ

祭日は近世では九月二十三日、戦前は十月十六・十七日、戦後は十月十四・十五日、近年は十月の第二日曜日と変遷している。

#### 頭人

頭人については前述してあるが「加古川文化財報告8」「加古川市の民俗」に簡潔にまとめてあるので転載すると、年のはじめに頭人を定める。頭人は六〜八歳くらいの男子で、総代が話し合って決定する。ただし、身内に不幸があった家は、一年間ケガレているので頭人を出せない。頭人が決まるとすぐによい日を選んで高砂の浜に行き、身を清める。この時、頭人・頭人の父親・総代・神官が参加し、神官が持ってきた海のもの・山のを供え、海水を体にかける。高砂の浜から帰ってくると頭人の家で参加者・近所の人たちが集って食事をする。

この日からまつりの当日まで、頭人の家のしるしとして小さな幟を家の出入口に立てる。この幟には、「頭人」という文字と頭人の氏名を記す。頭人の家を示すものとして、「神社調書」は、

陰暦九月十七日の当日其家の門先に祭壇を築き氏神を奉斎す。祭壇の様式は芝草を盛り重ね周囲には注連縄（しめなわ）を曳き廻らし中央に根つきの大榊壹本を植ゑ御神鏡幣帛を結び垂れ其両側に燈籠二基を建つ。

と記載している。また『増訂印南郡誌』にも、

旧九月十三日王壇築として氏神を奉斎すべき神居を頭人の門前に莢草（しば）を盛り大榊を植ゑて作り奉告祭を行ふ。頭人は氏子を代表すべきものなれば王壇築きの当日より斎戒沐浴凶事に触れず。

◇ ◇

近年の祭礼では小頭人も廃止されております。来年度（昭和六十一年）は宮前の当番になっていますが、昔のように頭人を出そうかという話があることを前述しておきました。

#### 祭礼の準備

略

#### ヨミヤの行事

略

#### ヒルミヤの行事

宮でみこしの神移しの式がある。次いで宮の前で「みこしの式」がある。「みこしの式」とは猿田彦が先頭を走り、シデ振りがシデを動かすのにあわせてみこしを練るものである。下の図は掛声・シデの振り方・みこしの練り方などをまとめ

掛け声	チョサ	ヨサ	(3回か5回くりかえす)		ヨイヨイヨイ	チョサヤ	ヨサ	チョサ	ヨサ
シデ 振り									
みこし									

<シデの振り方> 註：本図は昭和56年の秋まつりに大國が作成した文書を参考にまとめたものである。

たものである。宮の正面で三回、  
両端で五回ずつ練る。

#### 四、神吉八幡神社をめぐる民俗

##### 初宮参り

秋まつりのヨミヤの日、誕生に  
なるかならんかの子を母親、祖母  
が宮につれてきてお祓をしてもら  
う。これは氏子になりますとい  
う意味で行なう。子供には宮参りの  
晴着を着せる。男の子であれば、  
紋付・袴である。近所・身内のも  
のは子供の着物にお金を水引で結  
び付ける。

##### 湯立て

六月の中頃にミコさんが来て、  
病気をしないように（夏やせしな  
いように）と釜で湯をたく。祈禱  
をしてミコさんが榊に湯をつけて  
まく。この行事は上宮、下宮（御  
旅所）の順で両方おこなう。

##### 厄神祭・春まつり

二月十八日・十九日に厄神祭が

ある。この日は厄年にあたる人が参詣し、祈禱を受ける。十  
年くらい前から五・六升の餅を作り、餅まきをする行事が始  
まった。五月十五日には春まつりがある。これはお宮で式があ  
り、宮総代が上宮に参る。



神吉八幡神輿巡行路

# まつりの思い出

秋 祭 り

宮前 藤 河 頭 義

明治四十四年生

秋祭りは豊作の状況を神様が見て廻るものです。

一、頭人さん

八月一日に頭人さんを決めました。だいたい小学校一年から三年生くらいまでの男児がなりましたが、もしなりたい子供があれば優先的になれます。ない時はくじ引きで決めました。補欠も作っていました。当番の事の話しあいは全て頭人さんの家で行われました。そのため、その家では畳を新しくしたり、お茶菓子を出したりして接待をしました。たいこのけいこなども頭人さんの家でした。頭人さんの衣裳（着物やはかま）等は全て羽二重で費用がかかり大変でした。また冠やその他必要な物品は西村の「五香屋」さんで購入しました。

頭人さんは、宵宮の午後大池で池に入って水をかけて身を浄め、四時頃、お宮へ行って式をしてもらい翌日の神事に参列しました。この頭人さんは、お金がかかりすぎるとい理由で止めてしまいました。当時はどこの家も農業が中心だったので現金収入がなく、頭人さんになると大変物入りだった

からです。

二、徒 士（おかち）

羽織・袴にわらじをはいて、腰には刀を差し頭には陣笠と  
いういでたちでした。

今はボール紙で陣笠を作っていますが、昔はほんものをお  
ぶっていました。

三、みこしかき

十六人の大人の男がなります。

四、奉桜花（ほろばな）

女の子が生まれた家が奉桜花を作りました。

五、神馬二頭

神主さんと頭人さんが乗るもので、たいこの村で馬は飼  
っていました。ない村は他の村から借りて来ました。

六、神 事（じんじ）

お宮では「ヨォーサ」という大人の掛け声と「チョーサ」とい  
う子供の子供の掛け声をくりかえしながら神様の中央で七回、  
東で五回、西で三回みこしをかえます。これは四手に合  
せてみこしかきがおみこしを左右に倒すことです。この練習  
のために昔はけいこみこしがありました。道中もずっと四手  
をふって歩きましたので四手ふりも大変でした。みこさんは  
式の間、正面の能舞台（台風の時こわれてしまつて今はない）  
の上に座っていました。国恩祭の時にはこの能舞台で仕舞い

をしました。昔は笙（しょう）

やひちりき等の

雅楽も氏子がし

ていましたが今

は天理教の信者

に頼んでいます。

神事の巻物が今

もお宮に残って

います。最近

は神事の仕方を指

導できる若年層

がないのが気

にかかります。

七、神吉八幡宮

の氏子村

大國・鼎・宮前・神吉（大村につき二年続けて当番をする）

・天ヶ原（小村につき一度抜ける）・中西・西村の各村が当

番で神事をしていきます。今年（昭和六十年）は鼎が当番で来

年は宮前です。生石神社などと氏子が分かれているのは水の

関係ではないかと思われます。岸や辻は田への水路は加古川

から入っている曾根水の水域になっております。



八、赤ちゃんの宮まいり

その年生まれの赤ちゃんは全て秋祭りにお宮まいりをします。

昔を回顧して

神吉岩雄

大正三年生

神吉八幡神社の祭礼は毎年十月十七日、神嘗（天皇がその年の新穀を伊勢神宮に奉る祭事）の日が昼宮とって、お祭りの神事が行なわれていました。その前日の十六日は宵宮とって、祭典の諸準備が行なわれました。宵宮の夕刻に、トウニンサンは現在の稚児さんのような衣裳をつけ、厚化粧をして神の子となり、馬に乗りお宮に参詣し、神主のおはらいを受け、浄めてもらって、昼宮のトウニンサンとなりました。

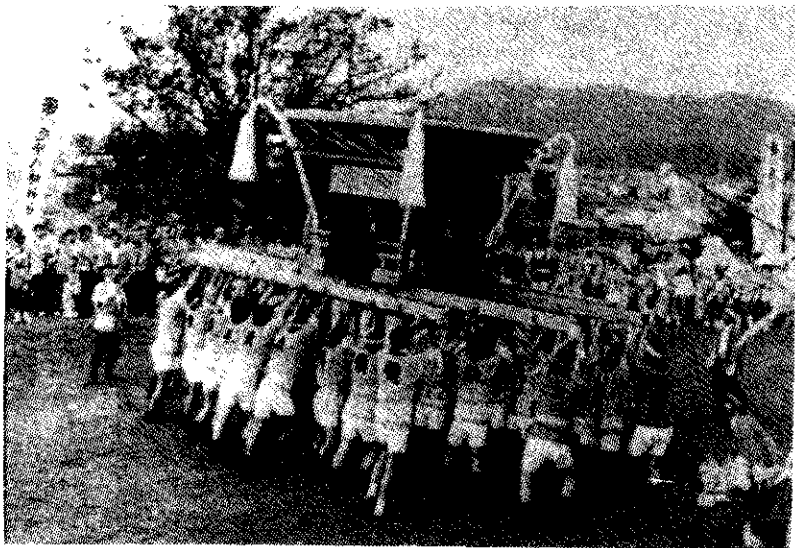
大正十一年十月、父がくじ引きでトウニンサンをあててきました。大役が当たって大物入りだと嘆いていたことを幼少ながら記憶しています。本人の私は、厚化粧をして馬に乗らねばならぬトウニンサンの役が恥ずかしくて、宵宮の当日、大池へ遊びに行つて隠れていたことを忘れもしません。近所の人や青年会の多勢の人が探しに来て、宵宮にお参りしなければならぬのに何してるのかと、連れて帰られました。急いで衣裳をつけ、化粧をして宵宮の行事を完了した事をいまだに記憶しています。

さて宵宮の行事として、宮前町内の青年会の会員は氏神様の鳥居前と、宮前クラブ前に提灯をたてました。又、各家庭の軒下にも御神灯の提灯を吊り、灯をともしました。昼宮は国旗を掲揚して心からお祭りを祝いました。当事の神事は実に荘厳であり、又、楽しいものでありました。子供心にもお祭りがくれば美味しい甘酒がのめるのが何よりの楽しみであり、又、特に播州名物の鯖ずしを各家庭で沢山こしらえ、お祭りのごちそうとし、お客さまにも振まい、弁当として持参して腹鼓をうったものです。

神吉八幡神社の氏子は八ヶ村よりなり、祭り事に関する神事は八年に一回の当番となります。当番に当たった村は、大変な物入りとなりました。又、お盆を過ぎ八朔と言って旧暦の八日一日以後は、神事の稽古で村内の老若男女一丸となりました。現在の九月上旬のように記憶しています。此の頃は田の稲も一段と青黒く成長し、稲作の水の心配もなくなった農家には、のんびりとしてお米の収穫を待つ時であり、氏神様を心から祈り、豊作を得るためにも、お祭りの神事は真心をこめて行いました。終戦前後はしばらく消えていましたが、現在は昔のように復興しつつあります。

お祭りの行事の役を決めるについては、前述の八朔に村人（戸主）全員クラブに集まり、役割配置に適した年令の男子をえらびました。トウニンサン一名、八才から十才位まで。

オカチといって陣笠をかぶり若武者風の殿さま行列である子供十才から十三才位、七・八名。オサキ太鼓老人二名。ホロ花戸主十数名。赤（天狗）ウン一名、赤（天狗）ワン一名、中年の長身者が選ばれました。この天狗は神事の主な看視役で、トウニンサン付きといわれていました。他に通称泣きじじいといって、ちょっと小型の茶色い天狗二名、神輿付きで、茶目っ気たっぶりの猩々がいました。



鼎の屋台

神輿行列では、お旅の時は神輿の前後に一名ずつの天狗がつき、ねりの時は二名の天狗が前後して六尺の檜の棒をプロペラの如くまわして先導しました。後続に十二・三人の四手振りがチョーサー・チョーサーと、頭上高く振ると、四手紙が